リレー企画 ＜不思議な夢＞

７番目の語り手

第７の語り手、日出彦は語り始めた。

庭のリンドウに舞うベニシジミに見とれていたC.G.ユング（以下CGJと略す）は、ふと湖畔に沿ったカラマツとブナの彼方から２人の紳士が此方に向かって歩いてくるのに気付いた。近づくにつれ、柳と比べた背の高さと顔付きから東洋からの人らしいことが見て取れた。２人とも身なりは隆としていて、最近よく見かける留学生に違いなかった。

CGJが湖畔の道に出て行くと、その内の１人が流暢なドイツ語で話し掛けて来た。

「坊や、このあたりにドクトール・コッホの別荘があると聞いて来たのだが、知らないかな。」

CGJは目をぱちぱちとさせて、首を傾げた。彼は名前に付いた敬称から多分医者だろうと見当を付けた。

「名前はよく知らないけど、この道をまっすぐ行くとお医者の家がありますよ」

そこで２人は顔を見合わせて、CGJには分からない東洋の言葉で話し合った。小鳥の囀りのように彼らの言葉を聞いていたCGJは何度か＜rinsan＞という単語を耳にした。どうやら、それが一人の名前らしいと推理するのに暇はなかった。さらに、耳を澄ますと、＜shibasan＞という単語も相手の人から言われるので、これも名前らしいと分かった。この国の人は、＜･･･san＞という語尾がつく名前のようだった。

「おじさんたちはどこからきたの」

CGJの問いに、＜rinsan＞が答えた。

「ずうっと東の方の国でヤーポンというのだよ」

「では、お疲れでしょう、お茶でもいかがですか」

如才なくCGJが誘った。この家の主のものまねだ。S夫人はこうしてよく旅人を誘う。

すると、＜shibasan＞が答えた。

「おじさん達は一寸急いでいるのでね」

「でも、お医者の家まではまだ歩いてかれこれ１時間はかかりますよ」

そこへまた教会の方から見慣れない30代の男がやってくるのが見えた。いつもは日に１人２人会えばいい方なのに、今日はまた何と多くの人が通るのだろうか、とCGJは思う。これもあの𝒥教授と１２人の不思議な客のせいかなと彼は考えた。思えば、あの者たちも得体が知れない。それに全員で13人というのも不吉な数だ。それで僕が呼ばれたのかな、とCGJはＳ婦人の顔を思い出しながら思った。

３人目の男が近づいたとき、玄関から𝒥教授が顔を出した。そして、２人は共に驚愕の表情を浮かべる。CGJは３人目の男が𝒥教授にそっくりであることを見て取った。

「おやおや、ご兄弟ですか」

と＜shibasan＞が尋ねた。２人はあいまいな表情で顔を見合わせている。そこに、いつの間にきたのかメイドのサマンサが声をかけた。

「まあ、皆さん。庭先に立っていないで、木陰にお茶をご用意しましたわ。この家の主人もご同席するそうです」

庭の片隅の陽射しを避けた一郭にテーブルが設えられて、初対面のメンバーが思い思いに座っていた。例の １２人の学生の中から＜hidehiko＞という中年の学生が陪席していた。この人も東洋系で背が低く、やや猫背である。東洋系同士でなにやら話し合っているのを CGJ は離れたところに設えられた自分用のテーブルから眺めた。

「＜hidesan＞と呼んでください」

と＜hidehiko＞がいうのが聞こえた。CGJ はここでやっと 3 人が同国人で、＜･･･san＞は Herr に相当する言葉であると気付いた。＜hidehiko＞は通訳代わりに呼ばれたらしい。

「奥様がお出でになります」

と大声で執事が叫ぶ。それまで、庭の景色に溶け込んでいて見えなかったのだが、必要なときに存在を明らかにする男である。

S 婦人はバラ色のドレスを纏って登場した。庭の薔薇によく調和している。暗い雰囲気の場が急に明るくなるのを感じる。S 婦人は既に中年を過ぎているが、２０代といってもおかしくはない。女優にしてもおかしくないほどの美貌とスタイルを持っていた。スペイン系の血を引いているような彫の深い横顔も見とれるほどである。父の話では、この人はかなり前に都から移り住んできたという。元は社交界の花であったとも、タブーになっているさる伯爵の私生児であるとも、父母のひそひそ話を盗み聞いて知っていた。

S 婦人は座につくと、

「何もありませんけれど、さあさ、どうぞ召し上がって」

と華やかな笑みを浮かべていう。そこには手製の焼き菓子が数種類と紅茶が並んでいた。

「カールも戴いている？」

と離れたところにいる CGJ にも声をかける。如才ない人である。

3 人目の男、𝒯教授にそっくりなので、仮に𝒻教授としておこうと CGJ は思った[1]。それにしてもよく似ている。服装もそっくりだ。これはドッペルゲンガーに違いないと CGJ は思った。人は一生に一度ドッペルゲンガーに会うという。会った人はそれから短い時期に天に召されるという伝説を、もう少し小さい頃、おばあちゃんからよく聞かされたものである。そのおばあちゃんも教会に礼拝に来たドッペルゲンガーに会った 1 ヵ月後に亡くなった。3 年前のことである。牧師の父はそんなことはないというのであるが、CGJ はおばあちゃんの言葉を信じている。

よくみると、𝒯教授と𝒻教授は一言も話していないようだ。𝒯教授も隣の S 婦人とのみ歓談している。わざと無視しているのか。𝒻教授はというと、＜hidehiko＞と何かを話している。先の東洋人２人は母国語で話し合っているようだ。焼き菓子が気に入ったらしい、と CGJ は見て取った。手前の皿から菓子の山が消えている。と、サマンサが追加の菓子の皿を運んできた。

「コッホ博士のところには何の御用で。あら、こんな立ち入ったことをお聞きしてもよろしいかしら」

とＳ婦人が２人の会話に割って入った。一瞬、どぎまぎしていた＜shibasan＞が答えた。

「私が師事しておられる方です。今日は同国の友人の Herr Mori にお引き合わせしたいと連れてきました」

「でも、あの方は変人ですわ。少なくともこの辺りでは。あら、ごめんなさい！」

Ｓ婦人の大胆な発言にしどろもどろしながら、＜shibasan＞が答える。

「でも、炭疽菌のご研究では斯界の第一人者です」

「そのようね。とても怖い黴菌なのでしょう？　よく、怖くはないのね。いずれ、それが誰

---

[1] 現在の表記ではＴ教授とＦ教授ということになるが、この当時はまだフラクトゥールといわれる中世の字体が使われていた。ドイツ語の花文字といわれる字体に名残を残すが、Ｔ（𝒯）とＦ（𝒻）とは子供泣かせなほどよく似ていた。（日出彦注）

かを殺すのに使われなければよいけれど･･･。でも、これからももっといろいろな黴菌を研究されて、有名になる方よ、きっと。･･･ということは、２人ともお医者さん」
　急に気付いたようにＳ婦人はいう。２人は声を揃えて答えた。
「そうです！　まだ、卵ですけど」
「多分、お国に帰ったら有名になるお方ですのね。偶然の出会いとしても、今日ここに皆さんがお集まりになったことは、とても素晴しいこととは思いません!」
　そういいながら、S 婦人は F 教授に顔を向けた。
「サプライズはもうよろしいわね。ラウールさん、変装を解いて見せて」
　にっこり笑った F 教授は立ち上がると、手際よく変装を解いていく。と、そこには、まだ 10 代の CGJ とさほど変わらない紅顔の少年が現れた。にっこりと笑いかける。後ろを向いて CGJ には片目を瞑ってみせた。
「どう、驚いたでしょう。一寸、いたずらをしてみたかったの。この子は私がパリで見つけてきたのよ。物凄い特技を持っていると思いません。私が始めて出会ったときには、コレットという花売り娘になっていたのよ。きっとこの子も世界に名を残す人になるわよ」
　多分、一番驚いたのは J 教授だったに違いない。タネが分かっても、なお顔色がひどく悪い。座っている椅子から少しずつ体が滑り降りていっているのを CGJ は見て取った。
「大変だ」

居眠りをしていたらしい。CGJ が目を覚ますとパーティは続いていた。
　J 教授も何事もなく歓談しているようだ。ナウマンという言葉が聞こえた。例の２人がＳ婦人を交えて論争していた。
「象の発見は高く買いますが、それ以外はいただけない」
と＜rinsan＞が叫んでいた。
　ふと、見ると玄関からよろめき出た男がいた。あの１２人の客の内の１人だ。アングロサクソン系かもしれないと CGJ は考えている。両手を前に垂れ、ぼそぼそと何かをつぶやきながら、こちらにやってくる。CGJ の脇を通り過ぎるとき、（悪夢だ！）（怖い、大鎌だ！）（若い女の吊るし首だ！）という言葉が断片的に聞こえた。意識があるのか、無意識なのか。その男が近づくと、メイドが悲鳴を上げて後ずさった。
　テーブルを囲んでいた者たちも漸くこの事態に気が付いた。最初に反応したのは J 教授だった。
「やあ、TomyJr.君ではないかね、一体どうしたのかね」
　S 婦人がこぼれるような笑みで迎えた。
「さあ、この席にお着きなさい」
　ゾンビだ、まるでゾンビだ、と CGJ は思った。

（続く）

　次の TomyJr.さん、ごめんなさい。ゾンビもどきにしてしまって。何とかこの危機を切り抜けてくださいね。

（東洋から来た謎の二人の紳士の正体は、はたまた J 教授に化けた少年の正体は、そして J 教授の正体と１３人の研修学生の運命は。謎は謎を呼び、待たれよ、次回！）